一

次の文章を読んで、後の1～11の問いに答えなさい。

＊　小学校五年生である「僕（小木）」と、同級生の根岸くん、金子くん、そこに転校生の高井くんが加わって、不発弾探しの遊びをはじめた。ところが夏休み中ささいなことから「僕」と根岸くんはけんかをしてしまう。ある日、高井くんが「僕」の家に突然やって来ると、「僕」に根岸くんとの仲直りをすすめる。

僕らはスイカを挟んで縁側に並んで座った。僕は裸足の脚をぶらぶらさせた。

「スイカ、喰えよ」

「うん、じゃあ。いただきます」

僕らはスイカに手を伸ばし、それを口に運んだ。祖母の言うように冷え冷えではなかったが、かなり甘くて美味しい。三日月に切ったスイカに歯形が付き、両方の頬っぺたに汁が流れた。

「根岸くんに連絡した？」

①僕はかぶりついたスイカの種を口の中で選り分けると、ほっぺたを膨らませて庭の遠くへ種を吹き出した。

「してない。向こうからだってこないし」

②高井はスイカの種を手のひらに出すと、それをお盆の隅に丁寧に置いた。

「みんなで不発弾探し再開しよう。藪の中だって探せばいい。ちゃんと蚊に喰われないように長袖のシャツとか着て、薬も用意して。それと、意地を張ってないで、根岸くんも誘ってさ」

「意地なんか張ってねーよ。それに悪いのは雄ちゃんだし。なんで、オレが謝んなきゃいけねーんだよ」

「小木くんに謝れなんて言ってないだろ。でも、みんなでやった方が③効率もいいし、それに……」と、高井は言葉を切った。

「それに、なんだよ」

「それに……。みんなと一緒の方が【　　】だろう？」

雄ちゃんに意地悪されていた高井が、一緒の方が【　　】なんて。僕は黙ったまま、また種を吹き出した。

「根岸くんは、確かにお調子者で、すぐ怠けるし、気分屋だと思うよ。それに、僕のことは嫌いだろうし……。でも、小木くんとはずっと友達なんだろ？」

「うん、まぁ。幼稚園のときからな」

④だったら、余計だ」

「お前が気にすることじゃねーよ」

縁側の前には、種を目当てに蟻が群がり始めていた。

「羨ましいって思ってたんだよな」

「はぁ？」

⑤思わずスイカを口に運ぶ僕の手が止まった。

「教室でもどこでも、君ら、いつも三人で楽しそうじゃないか」

「お前は迷惑そうな顔してたじゃねーか」

⑥「ああ、あれはポーズさ」

僕が拍子抜けするほど、高井はあっさりと答えた。
「なんだ、それ？」
「僕は小さい頃から、習い事ばっかりやらされてたから、放課後、誰かと遊ぶこともなかった。クラスメイトはいたけど、気づいたら仲のいい友達がいない。こっちに転校してきても、実は一年で戻るって決まってるし。それに転校生だろ、仲間外れにされるのが厭だったんだな。どうせ、仲間外れにされるなら、自分から近づかないようにした方がカッコ良く見えるかなって思ったんだ。ほとんどの男子からは嫌われると思ってたけどさ。でも、君らがふざけてると楽しそうで、羨ましくてさ。なんかそんなの見ててムカッとすることもあったし、バカだなぁって思うこともあったけどさ。ほら、池跳びだって」
「バカで悪かったな」
「でも、一緒に磁石取りに行ったり、不発弾探したりするのって面白かった。友達と遊ぶのって楽しいんだなって。ほら、小木くんがさ、お前も仲間だって言ってくれただろう。嬉しかったな。だから、続けたいんだよ、仲間で不発弾探し」
以前ならきっと、キザなヤローだとムカついたのだろうけど、⑦高井は妙に素直に喋っている気がした。
「だから、根岸くんと仲直りしろよ。根岸くんが僕を嫌ったままでもいいからさ。明日は登校日だし、どっちみち学校で顔を合わさなきゃならないんだから」
「ああ、考えておく」
僕はそう言うと、またスイカの種を遠くへ吹き出した。
高井が帰って昼ご飯を食べてから、しばらくゴロゴロしていたけど、どうにも高井に言われたことが気にかかって、僕は起き上がった。

「ああ、もうっ、くっそー。ちょっと行ってみるか」
《　A　》僕は自転車に跨がって雄ちゃんちへ向かった。気が進まない分、漕ぐペダルは重く、照りつける太陽が憎らしく思えた。
雄ちゃんちが近づくと、ゆっくりとペダルを漕いだ。
《　B　》
僕は言葉が見つからず、そのまま雄ちゃんちの前を通過した。そして角を三回曲がって、もう一度、雄ちゃんちの前に回り込んだ。でも、また通過した。
《　C　》そんなことを考えた。同じ道をぐるぐると四周しかけたときだった。雄ちゃんちの玄関扉が開いて誰かが出てきた。雄ちゃんのかあちゃんだ。僕はその姿に気づかないフリをして、スピードを落とすと目線をペダルの方へ下げた。
「あら、ブンちゃん」
おばさんが僕に気づき名前を呼んだ。
僕はいかにも今やってきたように、おばさんの前で自転車を降りた。
「こんちは」と、僕は頭を下げる。
「雄二かい？」
偶然、通りかかっただけだと言うつもりだったのに、つい、うんと頷いてしまった。
「ごめんね、ブンちゃん」おばさんは、いきなりそう謝った。
「え？」

「ケンカしたんだって？　まったく、あのばか。ホントにごめんね」
おばさんはパーマのかかったくしゃくしゃの髪に手を当てながら、僕に軽く頭を下げた。
「いや、ううん、その……」
⑧予期せぬ先制パンチをまったく別の人からもらってしまった気がした。
「ちょっと待ってね、今、雄二、呼ぶから」
おばさんは、玄関から階段を見上げながら「雄二、ブンちゃんがきてくれたよ。ほら、雄二、何やってるんだい、もうっ」と、大きな声で雄ちゃんを呼んだ。
でも、二階からの返事はなかった。
「あのグズ。ごめんね、今、とっつかまえて下ろしてくるから」と、おばさんは腕まくりをした。
すると「オレ、会わねーから」と雄ちゃんの声が聞こえた。
⑨「何、ごちゃごちゃ言ってるんだい、お前は」
おばさんは、玄関に立て掛けてあったほうきをぐっとつかむと、勢いよくつっかけを脱いで上がり端に片足を掛けた。
「おばさん、いいよ」
僕は慌てて声を掛けた。放っておけば、雄ちゃんはほうきの柄で二、三発は殴られそうだ。

〔森浩美『夏を拾いに』による〕

問1　――線①「僕はかぶりついたスイカの種を口の中で選り分けると、ほっぺたを膨らませて庭の遠くへ種を吹き出した」とあるが、この時の「僕」の動作の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　あてつけがましい忠告に反感をおぼえ、ことさら強がって男らしさを見せつけようとしている。
ロ　いつも通りの優等生的な発言を聞いて嫌気が差し、わざと返事をあいまいにしようとしている。
ハ　思いがけず聞かれたくないことを聞かれたので、乱暴な動作で不快な感情をあらわにしている。
ニ　急に質問されたのでまごついてしまい、気持ちを整理して返事の仕方をまとめようとしている。

問2　――線②「高井はスイカの種を手のひらに出すと、それをお盆の隅に丁寧に置いた」とあるが、この動作からわかる「高井」の人物像の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　自分の真剣な気持ちを、落ち着いて話すことのできる少年。
ロ　粗暴なふるまいを憎んで、常に礼儀正しさを忘れない少年。
ハ　小さいことでもおろそかにせず、丁寧な態度がとれる少年。
ニ　何に対しても気くばりを忘れず、友情を大切にできる少年。

問3　――線③「効率もいいし」とあるが、何の「効率」がいいのか。五字以内で文章中からぬき出しなさい。

問4　文章中に二か所ある【　　】に共通して当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　楽勝　　ロ　たのしい　　ハ　にぎやか　　ニ　はなやか　　ホ　友達っぽい

問5　――線④「だったら、余計だ」とあるが、どのようなことが「余計」なのか。わかりやすく言いかえた次の文の□に当てはまる表現を、文章中の言葉を使って十字以内で答えなさい。

・□だったら、余計に仲直りする方がよいはずだ。

問6　――線⑤「思わずスイカを口に運ぶ僕の手が止まった」とあるが、この時の「僕」の心情を三十字以内で答えなさい。

問7　――線⑥「ああ、あれはポーズさ」とあるが、高井君が「ポーズ」をとった理由を説明している一文を文章中からぬき出して、最初の三字を答えなさい。

問8　――線⑦「高井は妙に素直に喋っている気がした」とあるが、その時の「僕」の心情の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　今まで同級生を見下してきたことを高井くんが反省しているのに気付いて、許そうとしている。

ロ　高井くんが仲間と一緒に遊ぶために、友達の大切さをもっともらしく訴(うった)えていると感じている。

ハ　高井くんの言葉は自分の本心を語っているようで、そのまま受けとめようと思いはじめている。

ニ　高井くんは普段自分のいいところだけを見せるが、今は自分の欠点を出していると感じている。

問9　《　A　》～《　C　》に当てはまる「僕」の心の中の言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ　高井が謝りに行けばよかったのに。

ロ　おばさんに見つけられたらどうしよう？

ハ　もし会ったら最初になんて言えばいいんだ？

ニ　謝るんじゃない、ただ様子を見に行くだけだ。

ホ　向こうから僕を見つけてくれて声を掛けてくれないかな。

問10　――線⑧「予期せぬ先制パンチをまったく別の人からもらってしまった気がした」のはなぜか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　まずこちらからやっつけるつもりだったのに、関係ない人から突然攻撃されてしまったから。
ロ　自分から謝るつもりだったのに、まったく思いがけない人から謝罪の言葉をかけられたから。
ハ　仲直りをするつもりだったのに、余計な人が間に入ったため雄ちゃんに会えなくなったから。
ニ　様子を見に行くだけのつもりだったのに、結果として雄ちゃんを呼び出すことになったから。

問11　――線⑨「何、ごちゃごちゃ言ってるんだい、お前は」は、「おばさん」のどのような気持ちを表しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　顔をあわせたくないのを我慢し、話し合いが必要だという気持ち。
ロ　隠れていないで、男らしく正々堂々と戦ってほしいという気持ち。
ハ　仲直りすることが優先で、言い訳をする必要はないという気持ち。
ニ　母親が謝っているのに、陰でこそこそしている子を恥じる気持ち。

（問題は次のページに続く）

二

次の文章を読んで、後の1～11の問いに答えなさい。

ふつう、大人は子供に、他人の自由を尊重する人間になりなさい、と言う。それをなにか、道徳的なよいこととして教えたりする。でも、道徳と社会の基本のルールは同じものではない。

他人の自由を尊重することは、道徳的な「よいこと」とはじつは少し違います。他人の自由の尊重は、自分が「自由」であるための基本の資格なのです。

たとえば少し前に、「なぜ人を殺してはいけないか」、という問いが話題になりました。これも社会のルールとして、と、道徳的な問題として、という二つの側面がある。

社会のルールとしては、人を殺したり傷つけることは、自分が自由である資格を自分から投げ捨ててしまうことです。われわれが「自由」なのは、そう生まれついているからではなくて、相互承認の意志によって確保されている。これがこの問題の社会的側面です。

道徳的側面からは、答えは一つです。社会的には「 I 」は、自分の自由を確保するための条件です。殺せばペナルティによって自由を剥奪されるというルールになっていた。では誰にも見つからなければOKだろうか。「なぜ人を殺してはいけないか」という問いには、そういうことが潜んでいる。これがこの問いが含む道徳的な問いの側面です。

プラトンの『国家』という哲学書に、こんな話があります。ギュゲスという王様の羊の世話をする羊飼いが、あるとき、雷の落ちた穴のあとに一つの指輪を見つける。この指輪には不思議な力があり、それをはめると姿が消えて、誰からも見られなくなる。透明人間になるんです。つまりこれを使えば、「何をしても誰にも見つからず、 II 」。で、ギュゲスは何をしたか。

ふつうの人がいちばん望むことをした。【 A 】、姿を消して王様を殺し、王様のお妃まで自分のものにして自分が王様になってしまった。でも誰もギュゲスのしたことを知らないので彼は誰にも非難されない。

【 B 】悪いことをしても誰にも非難されないとき、人は自分の欲望を満たすために、悪いことをしないでいられるだろうか。これが「なぜ人を殺してはいけないか」という道徳的な問いに含まれる、いちばん肝心のポイントです。

つまり、もし罪を与えられないためという理由を除けば、人間が悪いことをしない理由、してはいけないほんとうの理由は何だろうか。これは、人間の道徳や倫理の根本を問うような問いで、大昔から、哲学も文学もこれを何度も考えてきました。

【 C 】、ここではごく簡単に答えておきましょう。社会的には、人を殺すことは、自分が自由でありうる社会的な資格を自ら投げ捨てることです。ペナルティはその事前の約束です。そして道徳的には、人を殺すと、自分が「人間的」に生きるための自分の中の根拠を自ら投げ捨てることです。殺すことによって得られるかも知れない利得と引き換えに、もう二度と自分はまっとうな、ちゃんとした人間だと、自分自身に言えなくなる。このことをとてもうまく書いているのがドストエフスキーの『罪と罰』です。機会があったらぜひ読んでみてほしい小説です。

いま「なぜ人を殺してはいけないか」は、二種類のルールにかかわっているという話をしました。一つは社会のルールで、もう一つは、そう、自分の中のルールです。この問題が複雑なのは、この二つのルールを区別することが難しいからです。

社会の善悪のルールは、法律とはまた別に、ふつう道徳とか、慣習（習俗）のルールと言われているものです。でも自分の中の善悪のルールは、これとはまた違うのです。自分のうちの内的なルールを、私は、「自己ルール」と呼びます。社会のルールと「自己ルール」の違いをうまく区別して理解することは、とても人間を聡明にします。

〔竹田青嗣『中学生からの哲学「超」入門』による〕

問1 ――線①「尊重」の「重」と読み方が同じものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 重心　ロ 重箱　ハ 体重　ニ 軽重

問2 ――線②「違います」の「ます」をとって「ない」をつけたとき、「違い」はどのように形がかわりますか。例にならって考えて答えなさい。

例 行きます → 行かない

問3 ――線③「他人の自由の尊重は、自分が『自由』であるための基本の資格なのです」と同じ内容を説明した一文を文章中からぬき出して、最初の三字を答えなさい。

問4 ――線④「自分が自由である資格を自分から投げ捨ててしまう」の意味として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 生まれつきの自由を否定する　ロ 自分の自由のみを尊重する　ハ 罰によって自由を剥奪される

ニ 罪の意識によって支配される　ホ 罰を受けることを恐れて逃げ回る

問5 [I] に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 殺せず（殺せない）　ロ 殺すべし（殺すはずだ）

ハ 殺すまい（殺すつもりはない）　ニ 殺すなかれ（殺してはいけない）

問6 [II] に当てはまる六字の言葉を、文章中からぬき出しなさい。

問7 【 A 】～【 C 】に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

イ もし　ロ しかし　ハ ところで　ニ つまり

問8 ――線⑤「このこと」とは何を指しているのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 人を殺したという罪の意識が、自分の人間性を破壊してしまうこと。

ロ 人を殺すことで、正しい人間として生きられなくなってしまうこと。

ハ 人を殺せば、罰を恐れて生きることしかできなくなってしまうこと。

ニ 利得と引き換えに人を殺すことで、自分の自由を失ってしまうこと。

問9 ――線⑥「読んでみて」の「みて」と同じ働きのものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 時間のあるときにみてください。　ロ 自分自身で考えてみてください。

ハ ぜひ自分でこころみてください。　ニ 小さな子の面倒(めんどう)をみてください。

問10 ――線⑦「自分の中のルール」と意味が異なるものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ お互いに相手の自由を認め合う資格　ロ 自分の心の中にある善い悪いの判断

ハ 自分が人間らしく生きるための根拠　ニ まっとうな人間としてのよりどころ

問11 ――線⑧「これとはまた違うのです」とあるが、その違いを説明した次の文の A ・ B に当てはまる言葉として最も適当なものを、後の語群から一つずつ選んで記号で答えなさい。

・ふつう道徳とか、慣習（習俗）のルールと言われているものは、その A を B が決定する点で違うから。

イ 基本　ロ 資格　ハ 自分　ニ 社会　ホ 善悪

（問題は次のページに続く）

三

次の文章を読んで、後の1～12の問いに答えなさい。

心配性の割に、物をよく落とす。なくしやすいのは、手袋やイアリングなど対になったものだ。片方なくした時の①がっかりした気持ちといったらない。いったいこれまでに、いくつの手袋を落としたことだろう。

駅や舗道に落ちている手袋を見ると、②はっとする。しっかりした革の手袋だと、虚空をつかむような形になっていることもあり、何か痛ましい感じがする。落とした人が探しに戻ってくるだろうか、と踏まないように気をつけて通り過ぎる。③そんな人は多いらしく、子ども用の小さな手袋が、クリスマスツリーの飾りのように(1)街路樹の枝に掛けられているのを見たことがある。

しかし、自分が落とした手袋の行方について、想像を巡らせたことはなかった。葛原妙子の歌を読んだときには、本当に驚いた。

A　落しきし手套の片手うす暗き画廊の床に踏まれあるべし

葛原　妙子

この作者は展覧会を見に行って、手袋を落としたらしい。夢中になって絵に見入っていたのだろうか。照明がセーブされた画廊に、自分の手袋が落ちている。絵を見に来た人が、気づかずにそれを踏む。別の人が、また踏む。作者にはそれが分かる。単に手袋が踏まれている光景を思い浮かべているというよりは、手袋が踏まれる度に自分の片手が④痛みを感じているような、(2)生々しい怖さがある。離れた場所にいながら、手袋は自分の(3)ブンシンとして存在している。この作者は、落とした手袋が惜しいのではない。かつて自分の手をやわらかく包み、自分の一部として慈しんだものが踏まれている。そのこと自体が耐えがたいのだ。

「べし」の解釈で、一首の感じは少し変わる。「きっと踏まれているに違いない」という意味に取るのが最もふつうの解釈だが、「踏まれていなければならない」と読んでもいい。不注意で落としてしまった手袋は、とことん踏まれるしかない。手袋は作者の誇りの象徴のようだ。そう解釈すると、いっそう自虐的な感じが強まる。どちらに取っても、誇り高い女性がきりりと表情を引き締めて痛みに耐えている姿が鮮やかだ。

作者は「幻視の歌人」と呼ばれた前衛歌人。⑤見えない光景を見る達人であった。

B　音絶えて沫雪にぬるる春の原手袋も用もなく出でて来ぬ

稲葉　京子

雪が降るときの静けさというのは、何もかも包み込むような独特の静寂だ。しかし、沫雪は水分を多く含む。「音絶えて」と表現したことでかえって、大きな雪片がほたほたと降りかかる［　Ⅰ　］音が聞こえるような効果が得られた。沫雪は積もることなく、地面を黒く濡らすばかりで、春の近さを思わせる。本格的な春が待ちきれない作者は、雪の中、手袋もせずに野原に出てきた。

「［　Ⅱ　］」と断るくらいだから、作者の家から野原まではだいぶ距離があるのだろうか。

(4)ニュウネンに作られた上の句に対して、下の句の「手袋も用もなく」という表現は、「おや」と思うほど無作為な感じがする。四句目の［　Ⅲ　］や、四句から五句にかけてまたがるフレーズの大らかさから、指先の冷えも気にならないほど手放しに春を喜ぶ作者の嬉しさが伝わってくる。

C　野に捨てた黒い手袋も起きあがり指指に黄な花咲かせだす　　齋藤　史

地面に落ちている黒い手袋がむっくりと起き上がり、五本の指それぞれの先から黄色い花が咲き始める。怖いような、美しいような、不思議なイメージだ。季節が春であることは「黒い手袋も」の「も」で分かる。手袋は、草木と連動して花を咲かせているのである。この手袋は農作業用の手袋だろうか。それとも、手袋の贈り主と仲違いでもして、冬の野原に捨ててしまったものだろうか。⑥私としては後者を取りたい。春の訪れと共に、氷は溶け、花が咲き始める。ものみな芽吹く季節に作者の心は浮き浮きとする。捨ててしまった手袋のことを、何だか気の毒にも思う作者の若さが楽しい。

〔松村由利子『語りだすオブジェ』による〕

問1　――線①「がっかりした気持ちといったらない」とはどういうことか。次の文の《　　》に当てはまる五字以内の表現を考えて答えなさい。

・《　　》ないほどがっかりすること。

問2　――線②「はっとする」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　いくつも手袋を落としているので、ひょっとしたら自分の落としたものではないか、という気がしたから。
ロ　落とした手袋の行方を考えたこともなかったのに、落ちた手袋を見た時、行方について初めて考えたから。
ハ　自分もなくすことが多いので、対になったものの片方を落とした人の、がっかりした気持ちがわかるから。
ニ　手袋を落とした人になったつもりで、あれこれ想像を巡らすうちに、昔の失敗を思い出してしまったから。

問3　――線③「そんな人」とはどのような人を指しているか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　落ちているものをそのままの状態にしておく人　　ロ　落とした人のうかつさをさらそうとしている人
ハ　落とした人の気持ちを思いやることのできる人　　ニ　道に落ちているものをかならず拾ってあげる人

問4　――線④「痛み」とあるが、「痛み」についての説明として当てはまらないものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　あるときは自分の一部であったものが、ないがしろにされるつらさ。
ロ　落とした手袋が踏まれるたび、自分の片手に感じる生々しいこわさ。
ハ　かつて自分の手をやわらかく包んだ手袋が、踏まれているくやしさ。
ニ　不注意のために、くりかえし自尊心が傷つけられてしまうせつなさ。

問5　――線⑤「見えない光景」とあるが、その光景を説明した部分はどこか。Aの歌に続く鑑賞文の中からぬき出し、その終わりの五字を答えなさい。

問6　［　I　］に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ　音にならない　　ロ　静寂をやぶる　　ハ　春が近づいて来る　　ニ　遠くから聞こえる

問7 Ⅱ に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 音絶えて　ロ 沫雪に　ハ 春の原　ニ 用もなく

問8 Ⅲ に当てはまる言葉として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 擬人法　ロ 字余り　ハ 倒置法　ニ 体言止め

問9 ――線⑥「私としては後者を取りたい」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ この歌の作者が最も歌いたいことは「春の訪れ」を感じたことだったので、浮き浮きした様子が明らかに感じられるから。

ロ この歌は美しいが不思議な雰囲気もかもし出されているので、「仲違い」という怖い言葉を連想した方がふさわしいから。

ハ 手袋を捨てた理由や春になった時の手袋に対する心情など、短歌に書かれていないことを、自由に想像できて楽しいから。

ニ 農作業用の手袋と言ってもほとんどの人は見たことがないため、その手袋のイメージが間違って伝わる可能性があるから。

問10 Cの歌についての筆者の鑑賞として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 次々と色鮮やかな花が咲く春の楽観的な情景をよんでいる。

ロ 捨てた手袋にも小さな花が咲く感傷的な情景をよんでいる。

ハ 手袋の指先から次々と花が咲く幻想的な情景をよんでいる。

ニ 春の花々が咲きほこるのどかで牧歌的な情景をよんでいる。

問11 ――線(1)「街路樹」、(2)「生々（しい）」の漢字の読み方を、それぞれひらがなで答えなさい。

問12 ――線(3)「ブンシン」、(4)「ニュウネン」のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

国語解答用紙

座席番号

受験番号

氏名

一

問1

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

A

B

C

問10

問11

二

問1

問2

ない

問3

問4

問5

問6

問7

A

B

C

問8

問9

問10

問11

A

B

三

問1

問2

問3

問4

問5

問6

問7

問8

問9

問10

問11

(1)

(2)

(しい)

問12

(3)

(4)

H 22 A